君如白石潔

賀川光夫

村上允英先生が別府大学文学部教授として史学科で地理学・地質学の講義を始めたのは、昭和六十三年四月からである。先生は昭和二十年九月九州大学理学部地質学科を卒業後、九州大学を始め山口大学教授として地質学を講義し、一方地質学の研究に傾倒し、日本岩石鉱物学会・日本地質学会等において地質学の向上に勤めたことは先生の業績によって明らかである。

先生とは同じ大正十二年生まれで、学生時代は太平洋戦争、苦労して学業を続けた戦中派である。それだけに話が合い、つい我が儘がでて御迷惑をおかけすることが多かった。先生の晩年の仕事に中国科学院地質研究所、ソ連科学アカデミー地質学研究所の共同事業として『東アジア地区地質図』の研究製作事業があった。先生は日本代表として、研究、製作のために東奔西走、先生の責任でこの事業を達成しなければならなかった。この事業には体制の違う社会主義国家である中国、ソ連（ロシア）との共同制作であること、韓国と朝鮮民主主義人民共和国は南北問題という困難な立場があって参加できないことなどがあり、研究と地質図作成には困難が多すぎた。

資金融資について相談を受けた私は何度か中央官庁、関係者を回り協力方をお願いした。事業の内容については反対はなく、直ぐにも協力してくれるような感触であった。そこで科学研究総合研究、民間研究費の書類提出は何度か試みたが、当時の政治事情の厳しさが障害となったようですべて実現しなかった。

一枚の地質図で東アジアを展望できることは、地震多発国である日本にとってこの上もなく便利であること、鉱物資

源などの有効開発にも、アジアの国々にとって便利であるはずであるが、もとより政治と純粋学問の次元の違うところからの出発であるから仕方がなかったのかもしれないが、残念な思いであった。

地質図の製作事業は担当の先生の肩には予想もつかないほどの重荷が掛かっていたようである。平成四年の九月初め、ハバロワスクから帰ってまもない頃、えらく疲れた様子がみえたのは心労の故だったのだろうか。この頃、中国やロシアでの会議の世話を含めて、先生の奔走が限界を越えているようにみえた。思えばこの時すでに先生の体は病気に犯されていたものと思われる。

平成五年には癌の摘出のため入院されたが、間も無く退院されて元気なお顔を見せてくれた。十一月の終わりごろだと記憶しているが、研究室に現れた先生のニコヤカなお顔を見たとき私は地質図が完成したな、と感でわかった。手にした地質図を差し出して、ようやく完成しましたといい、愉快そうに見せてくれた。

さて平成五年は年周りが悪いのか、私の親しい内外の友人が、次々に病気で倒れ、世を去った。鎌木義昌（岡山理科大学）、金元龍（ソウル大学）、ミッシェル・ブレジョン（パリ大学）などで、いずれも戦後の苦しい時代兄弟のように親しく助け合った仲であった。何とも暗い一年であったが、そんな中で村上先生の癌の手術はえらく気になった。

癌の特効薬として「冬虫夏草」がよいという話を聞いたのはこの頃であった。「冬虫夏草」は土中の昆虫に寄生している菌から特殊なキノコが生えることである。それを乾燥して煎用するとかなりの効果があるというのである。友人から君なら遺跡の発掘現場で発掘担当者に話をし注意してもらえばきっと見つけることができるといわれた。もとより気休めと思ったが、発掘現場を訪ねるたびに「冬虫夏草」の話をし、土中の昆虫を捜してもらうことにした。以外と早くそれを見つけることができた。

平成五年夏、中九州横断道路の玖珠、湯布院間の工事、事前調査の発掘現場カワジ池周辺遺跡で、セミの抜け殻が見つかりその中の幾つかに径四乃至五センチほどの細い茎が伸びているのがあった。発掘の作業員の中に「冬虫夏草」を

知っている人の目に止まったのである。「冬虫夏草」は少し湿った土中で、菌からキノコが生えるらしいこともわかった。その後も幾つか見つかったとの便りがあって現場を訪れ、四個のキノコを手に入れた。干し上がったキノコはあまりにも少なかったが、誰に尋ねてもそれは貴重な薬種だということでおすすめすることにした。それは「藁にもすがりたい」という気持ちからであった。気の強い先生が、時に抗癌剤の注射を打ち体がきついと言われていた頃であったためか、大変喜ばれた。

平素は弱味をみせない先生は、病気をかかえて学生のために最大の努力を重ね、元気で講義をする姿が窓越しにみえることがあった。博物館の三階にある私の研究室はどうゆうわけか二階の講義室と窓際のガラス戸が筒抜けになっていて講義が聞こえることがある。先生は張りのある声で講義をし、時に学生を叱ることがあった。学生は先生を慕い、今時には珍しい子弟関係をみせていた。

平成六年の早春、先生は憮然とした剣幕で研究室に来られた。そして一言「御報告したいことがあったが、先生の顔をみたらもういいです」といって、表情をかえ、いつものように楽しく話をし、一時間ほどして部屋をでた。三月には定年で大学を退職し、郷里の山口に帰られた先生は元気でお暮らしの様子であった。

平成六年の夏は、異常に暑く連日三〇度以上の高温の日が続き、時に四〇度を越える日もあった。その異常に暑い七月二十日、突然先生の訃報を聞いた。夢かと思ったが「無情迅速」であった。その夜、先生の「アジア地質図」を開いてその労作を称え、破詩を捧げてお別れをした。

以文迎友学　　生年七十余
十年如幻過　　君如白石潔
人生一炊夢　　千部経解畢
君倒病空逝　　菩提樹下生